

研究分野のキーワード：ルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語、言語接触、言語政策

## 研究紹介

私は、言語間の接触によって言語構造や話し手の言語意識にどのような変化が生じるのか、という問題を中心に研究しています。ここではルクセンブルクの事例を紹介します。

ルクセンブルクはドイツとフランスとベルギーに挟まれた小さな国（面積は神奈川県と同じくらい）ですが、グローバル化の進んだ社会、特にヨーロッパ社会の将来を考える上で重要な示唆を与えてくれます。それはまず住民の構成に表れています。人口 51 万人の中で外国人の占める割合が 43%（22 万人）にも上る国は他にはほとんど見られません。外国からの移住の流れは数十年前からのもので、現在でも続いています。つまり、ルクセンブルクの産業はまだ働き手が必要なほど発達しているということです。

ルクセンブルクは長らく他国の支配を経験した後、ヨーロッパ列強の駆け引きの結果、1815年のウィーン会議で独立が認められました。その後も周辺国のさまざまな思惑に翻弄されましたが、徐々に国民意識が芽生え、「ルクセンブルク人」という概念が確立されました。そのさい国民意識の象徴として言語が大きな役割を果たし、それまではドイツ語のルクセンブルク方言であったものが、「ルクセンブルク語」として育成され、確立していきます。このように「・・・人」や「・・・語」というものは、人の主体的な意識や行動によって創られるものであることを私たちはここから学ぶことができます。

ルクセンブルク語がドイツ語とどのくらい似ているのか、以下に例を挙げます。「その犬は庭にいます」を、ドイツ語では Der Hund ist im Garten.（デア・フント・イスト・イム・ガールテン）と言うのに対して、ルクセンブルク語では Den Hond ass am Gaart.（デン・ホント・アス・アム・ガールト）と言います。

ルクセンブルクは小国であり周辺諸国との交流なしにはやっていけないため、ルクセンブルクはルクセンブルク語、ドイツ語、フランス語の三言語を公用語とし、学校教育ではこれらの言語の修得をめざす態勢が取られています。例えば、小学校の授業言語は原則としてドイツ語であり、中等教育では学校種により高学年の授業言語がフランス語になります。じっさい多言語能力という点で、ルクセンブルク人は他の国民を大きく上回っているのですが、その反面、言語能力の不足が理由で小学校低学年の段階でつまづく児童がいることも問題視されています。特に、前述のように外国人が多いわけですが、その中で最大多数派であるポルトガル人（8.2 万人）を例にとると、家庭でポルトガル語を話しながら、学校で三言語を学ばなければならないわけです。こうした問題への対策が大きな政治問題にもなっています。

最近、多文化共生社会ということがよく言われますが、言語の問題ひとつ取っても解決すべき困難な課題がたくさんあることをルクセンブルクの事例が示してくれます。